

令和2年度第1回倉敷市スポーツ推進審議会 議事録

日 時 令和2年8月4日（火）10時～11時40分

会 場 倉敷市庁舎3階 議会第2会議室

出席者 審議会委員：松井会長・向井副会長・長尾委員・野見委員・原田委員・平井委員・
宮川委員・矢田貝委員

事 務 局：三宅局長・森分部長・小寺次長・山本副参事兼課長・岡課長代理・
千代延主幹・三宅主事

保健体育課：荻野指導主幹

障がい福祉課：月本副参事兼課長

傍聴者 0名

1 開会

委員自己紹介。

2 役員選任

会長に松井委員，副会長に向井委員を選任。

3 報告事項

報告第1号 「倉敷市スポーツ振興基本計画」の到達目標および令和2年度事業の取組みについて

事務局から，現行の計画の到達目標について資料を基に説明。

【事務局説明要旨】

現行の倉敷市スポーツ振興基本計画では2つの到達目標を設定している。

「成人の週1回以上のスポーツ実施率 令和2年度50%」について，平成31年度は

42. 9%という結果となった。資料1の2ページの数値を見てもわかるように、20代～50代の働く世代に比べ、60歳以上の数値が高い。スポーツ実施率の向上には、働く世代の実施率向上が不可欠であるといえる。

「国民体育大会における倉敷市関係選手団人数 令和2年度200人」について、平成31年度は74回会期前大会、本大会、75回冬季大会の合計で196人であった。出場者数の増加は、サッカーをはじめとした団体競技の出場数が伸びていることが要因であると考えられる。

資料1の1ページに各事業の実績を、レジュメ資料の3ページに各事業の評価をまとめている。平成31年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、事業実施に影響が出ている。

【出席者意見】

原田委員：レジュメ資料の達成度について、例えば7番「瀬戸内倉敷ツーデーマーチの開催」について、達成度はE「未着手」と評価されているが、開催に向けて準備して、開催直前に急遽取りやめている。未着手ではなく、D「指標を大きく下回った」という評価でよいのではないか。令和2年度以降も、コロナが何年続くのかわからない。その状況で、実施できなかった事業すべてをEとすると、Eの評価の意味がなくなると思う。

事務局（山本副参事）：おっしゃるように、ツーデーマーチについては、大会開催直前に中止となり、直前まで開催できるように準備してきた中で中止せざるを得ない状況となった。御指摘いただいたように、今年度もツーデーマーチに限らず、倉敷国際トライアスロン大会を含め実施できない行事は出てくると思う。すべてEということになると、何もしていないと捉えられかねないので、次回以降はそのように評価させていただきたい。

松井会長：原田委員の発言には賛同する。7番のツーデーマーチがE、そして25番「総合型地域スポーツクラブの充実」がE、これらは同じEでも内容と質が違うと思う。

評価については再考したほうが良いと思うが、宮川委員、どうか。

宮川委員：おっしゃる通りだと思う。少なくともツーデーマーチをEにするのはどうかと思う。

矢田貝委員：他にも、実施しているがやむなく中止となった同じような事業があると思うので、そこは評価を再考された方がよいと思う。

松井会長：20番のトライアスロンをC「指標を少し下回った」にしているが、大会は中止となったのでは。

事務局（山本副参事）：平成31年度は実施した。令和2年度は早くから中止を決めている。

松井会長：達成度を5段階で評価し、今回のように新型コロナウイルス感染症の影響、あるいは自然災害等でやむを得ず中止することは今後あると思う。評価項目を新たに加えておけばよいのではないか。スポーツの振興をするのに、何もやっていない「E」というのはいかなものか。

事務局（山本副参事）：そういった表記も考えていきたい。

松井会長：それはこの場所で決めるのか、事務局にお任せするというでいいのか。

事務局（山本副参事）：報告事項として報告させていただいているので、お示しした評価が「これはEではなくDなのでは」といった御意見があれば、その都度修正させていただきたい。

原田委員：AからEまでの評価をしているが、令和2年度以降のことを思えば、新型コロナウイルス感染症の影響といった項目を一つ設けておいて、取組の評価をして整理をすべきではないかと思う。

野見委員：質問だが、評価のルールは何かあるのか。AからEにそれぞれしている根拠は。12番「障がい者スポーツの普及・促進」がDとなっている。Dになっているから、Aにするための取組をどうするかといったことは、後から話をすればよいのか。

松井会長：それぞれの担当部署で、実績値の数値を計上し、それが指標に届いているかどうかを判断して評価している。これらの現状値を踏まえた上で、令和3年度からの

基本計画を作っていくようになる。

この件については、AからEの評価の他に、新型コロナウイルス感染症の影響によるという項目を設けるということでよいか。

野見委員：原田委員が言われたように、Eの下にそういった項目を設ければよいと思う。

事務局（山本副参事）：達成度の指標については、項目を加えることは可能である。野見委員が言われた評価の指標であるが、12「障がい者スポーツの普及・促進」については、資料2の13ページに掲載している。達成度は、それぞれの年度の指標目標に対して実績がどうだったかということで評価をしている。達成度の下「上記理由・原因」欄に、「新型コロナウイルスの影響による」といったことは書いてあるのだが、AからEの一覧表にしてしまうと、そういったことを表現するのが難しいので、新しい項目として設けたいと思う。

松井会長：今後、コロナが簡単に収束するとは思えない。スポーツ界においても新しい生活様式を取り入れて、変わっていく部分もあると思う。項目を新たに設け、なぜ実施できなかったのかという根拠を表記したほうがよいと思う。

報告第2号 令和元年倉敷市スポーツ章の追加表彰者について

事務局から、資料を基に説明。

【出席者意見】

特になし

4 議事

議案第1号 次期「倉敷市スポーツ基本計画」の策定について

事務局から、資料を基に説明。

【事務局説明要旨】

数値目標については、概ね過去4年間の数値を参考に設定している。1「成人のスポーツ実施率」と5「国民体育大会における倉敷市関係選手数」については、過去10年間で一度も達成していないので、据え置きとした。

2「中学校を卒業後も自主的にスポーツをする時間を持ちたいと思う中学生率」については、前回の審議会では「新体力テストにおける総合評価D及びEの児童生徒の割合」と「1週間の総運動時間数60分未満の児童生徒数の割合」と示していたが、変更した。「中学校を卒業後も自主的にスポーツをする時間を持ちたいと思う中学生率」を上げることは、国にも掲げられている大きな目標であり、体力テストの評価が低い生徒の割合を減らす、また総運動時間数が少ない生徒の割合を減らすことが、この大きな目標の達成に繋がると考え、項目を変更している。

【出席者意見】

松井会長：「中学校を卒業後も自主的にスポーツをする時間を持ちたいと思う中学生の割合」について、これはどういうことか。

事務局（荻野指導主幹）：生涯スポーツという考え方において、大人になってもスポーツをしたいという考え方は、豊かなスポーツライフに繋がると考えている。

松井会長：つまり生涯スポーツの考え方ということか。

基本的に、生涯スポーツ、成人の週1回以上のスポーツ実施率については、働く世代をどうシフトしていくかが大きな課題であると思う。アンケートの取り方で、ウォーキングやジョギングをしている人、会社の昼休みにラジオ体操をしている人などの実施率を拾えば、数値も上昇すると思う。不健康な人間を作ると、業績に反映されるので、企業も、不健康な人間を作りたくないはずである。働いている世代はスポーツをする時間が無いという認識だったが、企業の規模にもよるとは思うが、水島の企業は昼休憩に体を動かしているところが多いと思う。あくまで数値だけを考えるのであれば、アンケートの聞き方で、数値をクリアできるのではないかと思う。

矢田貝委員：アンケートの取り方もあるとは思うが、中学生を対象にアンケートをしているわけなので、その時点で運動をしていなければ、将来運動をしたいとは思わないと思う。資料1の10ページに運動部活動の加入率が載っているが、中学校によって割合が違う。何か学校毎の指導があるのか。私が子どもの頃は、中学校は必ず運動部に入ること、ただし体が弱ければ、文化部にも入れる、といったルールだった。文化部に入りたければ、運動部と掛け持ちでやる、という形で、必ず体を動かす部活動に入るといったルールがあったが、今は自由。部活動には入っていないけれど、地区のクラブに入って運動をしている人はいるのか。その辺りが分かれば。

事務局（荻野指導主幹）：そこの実情について精査したことは無いが、部活動を主としてやっていた部分が、現在はクラブチームであるとか、そういうところでやる生徒も増えていると認識している。

矢田貝委員：中学生のときは競技力向上を目的にスポーツをしていても、中学生を過ぎると、美容とか、健康づくりを目的にする人が増えてきている。いったんスポーツをやめてしまっても、ずっと続くような施策があればよいと思う。

松井会長：貴重な御意見だと思う。私は水球をやっていたが、学校の部活動でやっていた。今は部活動でなくとも、いたるところのスイミングクラブで水球ができる。クラブでやっている子は、部活動には入らない。一方で、例えばテニスは競技の登録者数が一番多い。部活動やクラブもテニスはすごく多い。しかし部活動ではなく、クラブで活動している生徒はカウントされていない。アンケートの聞き方に変化をつけることで、実施率の数値はすぐに上がると思う。宮川委員、いかがか。

宮川委員：次期計画における数値目標の設定は、生涯にわたるスポーツ活動の推進を目的としている。今やっているスポーツをベースに、将来も続けてスポーツをしたい気持ちになるかどうかを目標としている。その目標値を、男子80%、女子70%に設定する根拠がなかなか難しいと思う。この数値をとるアンケートは毎年やっているのか。

事務局（荻野指導主幹）：本来であれば、中学校3年生を対象にした方がいいのかと思うが、
「全国体力運動能力調査」の中の質問項目にあるので、中学2年生が対象となっている。全国の中学生に同様に質問している。

宮川委員：これは難しい問題だと思う。子どもの頃に運動を頑張っていたら、大人になったときに、もういいやと思ってしまう人もいる。そうならないように、市のスポーツ振興施策は何をすべきかを考えるべきであると思う。

松井会長：競技スポーツと、生涯スポーツ。スポーツで競う、スポーツを楽しむ、その辺をしっかりと区別して、また在り方を認識して、協議しながら発信していかないといけない。ある先生はガンガンやって、高校に進学した生徒は燃えつき症候群でスポーツをやめてしまう。またある先生は、長い間にわたって競技を続けてもらおうとするが、親御さんとしては、もっとやってほしいと思う場合もある。

宮川委員：小学生、中学生時代に、スポーツをたくさんやることは、倉敷市の目標ではない。あくまで倉敷市の目標は、そういった生徒達が、将来にわたって何パーセントスポーツを継続できるかという数値を追っていけば、本市の特徴的な目標になるのではないか。

松井会長：この目標に向けて、どうしたらいいかを考えていけばよい。

宮川委員：そういう意味では、今は80%、70%の設定としているが、90%にするとか。ここを強調するのであれば、数値をもっと上げてよいと思う。具体的に何をするかは問題だが。

松井会長：学校体育は保健体育課、生涯スポーツ、社会体育はスポーツ振興課が担っている。この2つがしっかり連携しないといけない。以前から申しているが、横串を入れて、連携しないと、生涯スポーツと競技スポーツは成り立たない。数値目標は上げていいと思うが、具体的な施策をどういう風につくるのかは、連携を密にしないと意味を為さないと思う。

宮川委員：数値の検討ということであれば、もう少し高めであれば特徴が出てよいと思う。また、働く世代に関する観点から述べたい。最近、24時間営業のフィットネス

クラブやジムが増えている。そこに参加している人の動向として、若い方は多いのか。あの辺りに参加している人の数字は、働く世代の平成30年度、平成31年度の数値に現れているのか。あるいはコロナが無ければ、数値としてもう少し伸びているのか、その辺りを吟味されては。

別件で、11「倉敷市スポーツ情報サイト「Kurashiki Sports Navi」の閲覧数」の件数が、かなり上がっている。今までの努力が功を奏して上がっているのか、あるいはコロナの影響で、施設情報を得たいという需要が高まったのか。努力目標をこのコロナ禍で考えるとすると、「する」スポーツができないのであれば、このサイトの中で、「みる」スポーツができるようなコンテンツ、例えば有名選手がストレッチ指導をしているような動画であるとか、そういったところを充実させると、閲覧数も上がるのではないか。

松井会長：働く世代の実施率について、24時間営業のジムを利用している世代はどういった人なのか。

事務局（山本副参事）：具体的な数字は追えていないが、学生のような若い世代が、わざわざ深夜に、といった利用形態ではないと思う。働く世代の方が利用しているのではないかと推測される。民間企業の数字をどれだけもらえるか分からないが、概要を調べ、そういったところを拾って実施率の向上につなげる必要はあると考える。

松井会長：その辺りの概要が分かれば、目標達成に向けて進むことはできると思う。情報サイトについて、原田委員、提供している中身としてはどうか。

原田委員：情報としては、イベント情報、つまりスポーツ施設の公園における行事、そして教室の募集が主である。

先ほどの24時間営業のジムについて補足であるが、四十瀬のトレーニングジムは9時から21時まで開放している。今はコロナで19時までとしている。利用者の年齢層としては、午前中がシニア層、午後が主婦層、夕方は仕事帰りの若い世代が多い。現在は1時間半の交代制で定員を20名としている。くらしき健康福祉プラザのジムが、換気できないことを理由に休止しているため、その利用

者が午前中に流れて来ている。10時半からの時間帯を目指して午前中はシニア層が、食事が終わった後の午後は主婦層が多く来ており、夕方は若い世代が多い。

松井会長：健康に生活をする、健康に老いるということは、50代、60代の願いだと思う。そこに向けた指標があるわけで、アンケートの取り方を工夫して、本市における特色を出す方向性をつくってはどうか。全国に先駆けて、これはすごいという施策を、数値目標をもとにつくってはどうかと思う。過去4年間の数値をベースにするのもよいが、10年間様々な事業をやってきたわけなので、スクラップビルドではないが、新しいことをやってみてはどうか。

平井委員：私は保育園の理事長をやっている。福山市の私立の幼稚園では、幼稚園へ出向いて、スポーツを教えるプロがおり、子ども達がスポーツをするための指導をしている。倉敷市ではそういった、スポーツ教室から指導者をお呼びすることは制度としてできない。子ども達はスポーツに対して強い関心を持ち合わせている。そういったニーズがあるところに、適切な指導体制があれば、倉敷ならではのスポーツ振興の一助になるのでは。予算がかかるとは思うが。保育園、幼稚園に、スポーツの指導員を派遣できる制度や仕組みみたいなものがあれば、園の方針にもよるが、選択できるような施策をつくれれば、スポーツに対する興味や関心の底上げに役立つのではないか。先生は女性がほとんどであるため、スポーツに堪能な先生が少ない。園庭で遊ばせているのはあくまでも遊びであって、多少でもテクニックやルールが知識として与えられるような体制ではない。スポーツに通じた人を招へいできる体制が望ましいのでは。

原田委員：平井委員のおっしゃる部分については、倉敷市スポーツ振興協会では、市内全域までは至っていないが、教育の部分で手伝いをしている。例えばサッカーの蹴り方といったことや、マット運動や鉄棒、跳び箱ができるようになる教室をさせてもらっている。コロナ禍においてこの秋は中止しているが、例年はかなり人気である。ニーズがあれば、もっと出ていかなければと思っている。

松井会長：平井委員が言われるのはもっともである。幼児期からスポーツに触れていれば、

スポーツ離れは避けられる。向井委員，スポーツ推進委員は，各小学校区に2名いるのか。倉敷市は何人おられるのか。

向井副会長：140人である。(注；現在の委員数126人(定員130人))

松井会長：そういう方と連携を図り，幼稚園や保育園の子どもたちに情報を流してあげて，スポーツ推進委員を派遣してはどうか。県のスポーツ協会では，トップアスリート派遣事業という2千万円ほどの事業をしている。県内のプロスポーツチーム，例えばフェジアーノ，シーガルス，トライフープ，リベッツの方を，小学校等に派遣させている。子どもときからスポーツに触れあう場所がないということが問題になったので，いいものに触れさせてやろうということで，実施している。「みる」，「ささえる」という項目を充実させるには，スポーツ推進委員と連携をとられてみてはどうか。

向井副会長：スポーツ推進委員は，要望があれば出ていかななくてはならない。しかし，昼間は仕事をしている人が多いので，なかなか行けない。休み時間や休日となると，放課後子ども教室や老人クラブなどから要請があって派遣されている。スタッフとしては，人材が足りるかどうか。

松井会長：しかしながら，様々なスポーツ活動をやっている組織や団体と，我々が抱えていることを総合的に判断し，こういった連携ができるといったことを，次年度からは計画の施策に盛り込んでいく必要があると考えている。

向井副会長：最初から「こういうのがあるよ」と言ってもらえれば，そこに向かってやってくれると思う。やるのであれば，スポーツ推進委員の事業の中に，最初から入れていただきたい。

宮川委員：一部の幼稚園では，幼稚園が終わったあと，民間の教室，例えばサッカー教室へ保護者がお金を出して行かせているところはある。そこで例えば，市から幼稚園に補助金を出して，幼稚園が終わった後に，園がそういった教室を開きやすい環境にしてあげることが必要ではないか。園児が色々なスポーツに出会う機会は増えると思う。

松井会長：スポーツにおける地位の向上を目指すべきなので、委員の皆様には色々な意見を言っていただければと思う。事業として成り立つか成り立たないかは事務局の力次第だとは思いますが。しかしそうしないといつまでたっても、ただ集まって数値目標の結果ばかりを聞いて審議会が終わってしまうということになる。新しい仕組みづくりをしていただければと思う。そうすれば、スポーツがより一層文化として定着するのではないかと思う。数値目標はあくまで目標である。これはもう少し上げた方がよい。上げてチャレンジしていこうということでもいいと思う。

野見委員：数値目標の3「障がい者スポーツ・レクリエーション教室開催等事業参加者数」では、平成31年度の参加者数が2,347人となっている。私は、くらしき健康福祉プラザのデイ以外で、講習会やその他の類が実施されているのを見たことがない。私自身は車いすテニスをやっており、岡山市でも活動している。どのスポーツにも岡山市長杯はあるが、倉敷市長杯はない。マスカット（倉敷スポーツ公園）でも活動しているが、岡山市のイベントであり、倉敷市のイベントではない。倉敷市のイベントとしては、倉敷市民スポーツフェスティバルに1回参加しただけである。市の取組としては、プラザのデイ以外で何かあるのか。認識不足で見えていないのであれば見えるようにしてほしい。

事務局（月本副参事）：平成31年度参加者は2,347人で、これはプラザのデイスポーツの教室の参加者数である。障がい福祉課から委託している事業で、本課が把握しているのはこれのみである。

野見委員：デイ以外だったら、市の障がい者スポーツに関する事業は何もないということになるのか。

事務局（月本副参事）：現状そうである。

野見委員：そうであるなら、評価としてはDでなく、Eとか、もっと下のFになるのではないか。障がい者スポーツを普及していくという観点で言うと、倉敷市全般を見たときに、障がい者スポーツの拠点がプラザだけというのは、少し足りないのではないか。デイの中で、スポーツの講習会は、どの競技も年1回はしている。それ

に向けた倉敷市車いすテニス大会とか、そういった大会をどんどんやっていただけたら、DがA「指標を上回って達成した」になるのでは。この場はそういったことを議論する会議ではないのか。初めての会議なので的外れなことを言っているかもしれないが、そうであれば教えてほしい。

事務局（月本副参事）：障がい福祉課から本計画に出している事業というのが、デイスポーツの参加者数であり、その周知や体験会を通じて、Aに近づいていこうというのが現在の目標である。

野見委員：プラザだけでは少ないのでは。そこに携われる人は少ないと思う。障がい者といったら、自分から出て歩かない人が多い。プラザに来る人は拾えるが、来ない人にアピールするために、各地で催しをしてもらえたらと思う。

事務局（月本副参事）：この数値には入っていないが、10月には「いきいきふれあいフェスティバル」を実施している。昨年度は玉島で開催したが、そこでボッチャの体験をしたり、イベントをしたり、そういった機会の中で、障がい者スポーツにも触れてもらえる取組みはしている。

野見委員：市長にも言わないといけませんが、市長杯という名目で、各地で大会などの事業をしてもらえたらと思う。検討をお願いします。参加者数の内訳は理解した。

松井会長：数値目標等は事務局をお願いします。計画策定のスケジュールは、提案いただいたとおり、10月に開催される審議会までにまとめてもらい、冊子を年度内に完成させるということをお願いしたい。

議案第2号 倉敷市スポーツ章内規の改正について

事務局から、資料を基に説明。

【出席者意見（抜粋）】

向井副会長：よく分かるようになってよいのではないかと思う。

その他

松井会長：その他意見があればお願いしたい。

原田委員：先ほどの数値目標についてだが、ちょうど現在、備南東中学校の大会を開催している関係で申し上げたい。中学校の働き方改革も話題に上っているように、先生に負荷がかかって大変だということを認識した上でお願いをしておきたいと思う。今後の国体に向けては、中学校の部活動の土壌があつてこそ、高校で、また社会人になって活躍できるものと思っている。特に危機感を覚えているのは、色々な競技において上位の成績を出ているのは総社東中、総社西中の生徒が非常に多くて、市内の中学校は少ないということである。つい先日もハンドボールの県大会で、総社が男子、女子アベック優勝していた。倉敷市はもう少し頑張らないといけないということを中学校の先生方、本日御出席の保健体育課の荻野先生にお願いしておきたい。未来のアスリートの発掘育成に繋がると思うので、ぜひお願いしておきたいと思う。

5 閉会

閉会あいさつ 倉敷市スポーツ推進審議会 副会長 向井 彰